



地元企業説明会 ～地域で働く大人の心意気を実感！～

本校では、明日の地域社会を担う人材を育てる目的で、12月18日(金)の午前中に、地元企業の高校内説明会を実施しました。これは従来ハローワークが高校で行っている事業に加え、立科町商工会様の協力のもと「立科町企業説明会」も併催しました。これは、以前本通信No.17でも取り上げた「蓼高コンソーシアム」に基づく本校独自の取り組みです。

私は今まで、様々な学校で進路指導係の仕事をしてきました。人口減少で悩む地域にある高校では、地元を支える人材を育て送り出すために必要なことは何か、絶えず試行錯誤してきました。そこで得た結論は、地元で働く職業人の大人から熱い想いをじかに聴き学び、「心のきずな」を持つ機会をつくる以上の有効策はないということです。

さて、当日参加した企業は20社。この中の半数が地元企業のご協力をいただきました。そして参加生徒は本校生1,2学年全員と佐久平総合技術高校2年生と小海高校2年生の約180名に上り、体育館や格技室まで使用しての大賑わいになりました(新聞記事は裏面)。

各講座では他校の生徒による良い刺激があり、皆目を輝かせて企業の方々のお話を聞き入っていました。企業の方も単なる企業の紹介だけでなく、この仕事の意義や面白さを実際の業務に即してお話し



してくださり、高校生に向けて「今やるべき大切なことは、友人や先生方との信頼関係を大切に、日頃の生活や挨拶をしっかりすること」など、分かりやすいアドバイスまでしてくださいました。生徒諸君も大人の熱いメッセージに応えるかのように、積極的な質問や発言が多くみられました。

最期に、本校進路指導係が中心に取り組んだ今回の企画。生徒の心に自分の未来を選択する上でかけがえのない経験を刻んだと確信しています。



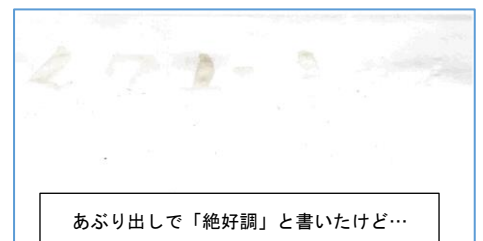
困ったお話(その18) (失意のあぶり出し)

年の暮れも近づき、年賀状の準備をする季節だ。思えば小学生のころ友達との間で、あぶり出し年賀状というものがはやった。みかんの汁で字や絵を書いた紙を火であぶると、文字や干支の絵が浮き上がってくるのだ。実際届いた年賀状をあぶってみると、何が書いてあるかさっぱりだった。それでもみんな喜んでいたので、類は友を呼ぶとおおり、私も友達もそろって頭が悪かったに違いない(今も変わらないが、何か?)。

ある年、愚かな私が一目置くほどの友達から裏面白紙の年賀状が届いた。表面に「この年がじょうはあぶり出しです。」と書いてある。こんな大胆なあぶり出しは初めてだったので期待しながらコンロであぶったが、一向に字が浮かび上がってこない。その次の瞬間、年賀状がメラメラと勢いよく燃え出した。慌ててたたき消したものの、半分が燃えてしまい、楽しみにしていたお年玉くじ番号欄も消失してしまった。

休み明け、失意の旨をそいつに話したら目を輝かしてこう言われた。「ひっかかったー！ おめえに送ったの最初から何も書いてないやつだよ〜ん。」

あれから半世紀近くが過ぎたが、今これを書いていて無性にごうがわいてきた。良い子のみんなは火事になるからやらないでね。



2020（令和2）年 12月19日（土）

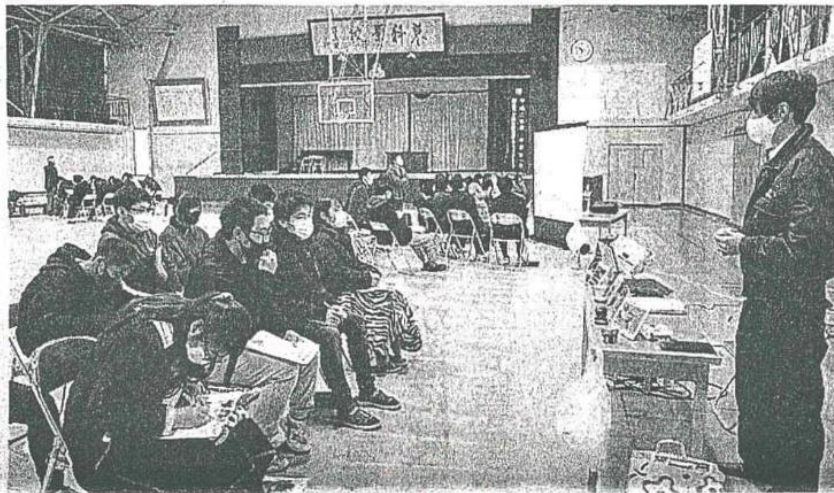
信濃毎日新聞朝刊 第27面

佐久地域の産業 20社が魅力紹介

蓼科高で企業説明会

立科町の蓼科高校で18日、佐久地域の企業20社による「校内企業説明会」が初めて開かれた。佐久公共職業安定所（佐久市）と同校の共催。佐久平総合技術高校（佐久市）や小海高校（小海町）の生徒も含む1、2年生約180人が参加し、地域産業への理解を深めた。

仕事への意識を向上させ、地元企業へ就職を促す目的。



企業担当者（右）から説明を受ける生徒たち

生徒は20班に分かれ、各班が教室や体育館などで1企業に

つき25分間ずつ、計4社から話を聞いた。企業側は自社製品や社内教育制度などを説明した。

スーパーのツルヤ（小諸市）の担当者は「うちで向いているのは変化に対応できる人。世の中に役立ちたいという気持ちが大変」と語り、蓼科高の1年生男子（16）は「よく行くツルヤが新鮮な食べ物をいかにそろえているか分かった」。エンジン部品製造の立科金属（立科町）の説明を聞いた同校2年生男子（17）は「雰囲気良くて志望企業に加えたい」と話した。